



人びとの全ての罪をあがない、救世主となるイエス様。でもなんとかわいいことか】

2014 年 12 月 24 日の夜はマニラにいた。

夜更けて訪れたホテル近くの(バランガイ)集会所の前の広場にて撮影した写真である。

近隣住民の手で、生誕の様子を飾りつけたものである。

神々しい物語とは、おおよそかけ離れた、素朴な手作りである。

キリスト教国であるフィリピンのクリスマス。

イエス生誕の日を心から待ちわび、そして、その日は国中が祈りに包まれる。

厳かな深夜ミサが各教会で行われ、そして、街のいたるところ、こうして生誕を祝う飾り付けが暗がりを照らす。

この日の夕刻、満席のフィリピン航空機でバンコクから飛び立った。

乗客の大半はフィリピン人、そして出稼ぎ労働者と分かる独特の雰囲気をも機内に醸す。

隣に座った 20 代後半と思われる女性もそのなかの一人。

聞けば、雇用契約に基づき、やっと 3 年ぶりの帰国となったとのこと。

3 年の歳月を経て、家族や友人が待つ故国に刻々と近づく。

そして、窓外遠くにマニラの街の灯がきらめき始める。去来する思いはなにか。

タッチダウン(着地)の瞬間、期せずしての拍手と「メリークリスマス」の大歓声。

その大歓声の余韻が、このあどけないイエスの表情に重なる。